

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520671

研究課題名(和文) 人物を通して見る近代日本における朝鮮語教育史の多元的・実証的研究

研究課題名(英文) A Multipronged and Demonstrative Study Using Author Analysis on the History of Korean Language Education in Modern Japan

研究代表者

植田 晃次 (UEDA, Kozi)

大阪大学・言語文化研究科(研究院)・准教授

研究者番号：90291450

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：人物の全生涯を連続的に捉える「人物史主義」、資料の原物を実見する「原物主義」という方法論に依拠し、「旧朝鮮語学」に基づく学習書の書誌調査・分析を人物に注目して行った。その結果、(1)学習書の書誌学的データを補充・精密化した。(2)代表的著者の経歴・活動についてこれまでにない詳細な解明を行った。(3)これらの著者が自らの学習書で朝鮮語を如何に分析し、捉えようかとしたかを詳細に明らかにした。(4)「朝鮮文」という概念など「旧朝鮮語学」の内容を分析した。(5)日本における朝鮮語学習書のロシア・ヨーロッパへの影響等を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this study, we (1) examined bibliographical data from Korean-language textbooks written by Japanese authors, (2) explored the careers and activities of the authors, (3) discussed how the authors grasped the structure of the Korean language, (4) analyzed the components of Korean linguistics at the time the textbooks were published, and (5) revealed what influence the textbooks edited by Japanese authors had on the textbooks edited by Russian and European authors.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：外国語教育

キーワード：朝鮮語教育史 朝鮮語学習書 旧朝鮮語学 人物史主義 原物主義 朝鮮語 韓国語 朝鮮語学

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は2005～2006年度に基盤研究(B)「日本における朝鮮語教育史の総合的・実証的研究」のご配慮を受け、日本近現代朝鮮語教育史の全体像を描くことを試みた。これは総論に当たる。これを承け、2008～2010年度に基盤研究(B)「学習書を通して見る近代日本における朝鮮語教育史の多元的・実証的研究」では、各論のひとつとして、まず学習書に注目して研究を行った。本研究はこれらの延長線上の各論のひとつに相当するもので、人物に注目して研究を行った。

2. 研究の目的

外国語教育において、制度、人物、教科書は三位一体を成す要素である。本研究は明治初期から第2次世界大戦終結以前の時期に、植民地朝鮮を含めた日本で行われていた朝鮮語教育の諸相について、共通の分析対象として、朝鮮語に関した「人物」に注目し、「人物史主義」・「原物主義」に基づき、関連する学問領域からのアプローチによって当時の朝鮮語教育の実態をミクロの視点から多元的・実証的に明らかにしようとした。

3. 研究の方法

本研究は2008～2010年度の研究によって確立された「原物主義」(可能な限り影印本・複製本ではなく、原物を実見した資料に基づいて研究を行う方法)・「人物史主義」(朝鮮・朝鮮語と関わらない時期を含めたその人物の生涯を通して、時代の中にその人物や著作を位置づけて考察する方法)を採った。

「人物」という共通の分析対象を設定し、研究代表者が社会言語学・朝鮮語教育史の観点から、研究分担者が言語学・朝鮮語学の観点からという多元的アプローチにより人物分析を、(1)書誌学(著書)、(2)社会言語学(生活)、(3)言語学・朝鮮語学(朝鮮語をどう捉え、伝えようとしたのか)、(4)朝鮮語教育史(朝鮮語との関わり)、(5)歴史学(時代的背景)という5つの側面から実証的に行った。

4. 研究成果

「人物史主義」・「原物主義」に依拠し、人物に注目して学習書の書誌調査・分析を行い、その人物の人物史と朝鮮語観を解明することを柱として近代日本における朝鮮語教育の姿を明らかにした。

その主要な成果は以下の5点である。

(1) 学習書の書誌学的データを補充・精密化した。

国内の都道府県立・政令指定都市立図書館に所蔵される当該学習書について、原物主義による調査をほぼ終えた。国内の市立図書館・私立図書館等については、継続して調査を行っている。国外の図書館については、大韓民国の国立中央図書館・国会図書館・ソウル大学図書館、中

華民国の台湾大学図書館・台南市立図書館等で調査を行い、継続してデータを収集・精密化している。

(2) 代表的著者の経歴・活動についてこれまででない詳細な解明を行った。

具体的には、赤峰瀨一郎・島井浩・伊藤伊吉・金島苔水(治三郎)・奥山仙三などの経歴・活動について、従来不明であった朝鮮・朝鮮語と関らない時期をも含めて、その人物史を明らかにした。

(3) これらの著者が自らの学習書で朝鮮語を如何に分析し、捉えようとしたのかを詳細に明らかにした。

具体的には、『日韓英三国対話』(赤峰瀨一郎)・『実用韓語学』(島井浩)・『独学韓語大成』(伊藤伊吉)・『韓語通』(前間恭作)・『韓語文典』(高橋亨)・『文法註釈韓語研究法』(薬師寺知囃)・『国語鮮語双舌通解』(小野綱方)・『朝鮮語法及会話書』(奥山仙三[朝鮮総督府名義])・『語法会話朝鮮語大成』(奥山仙三)などの学習書について、朝鮮語学・言語学の視点から詳細に分析した。

(4) 「朝鮮文」という概念など、「旧朝鮮語学」の内容を分析し、精密化・体系化した。

1894年頃から1945年まで使われた朝鮮語の文語体の一つであり、口語を基礎にした「朝鮮語(鮮語)」に対し、漢字語を漢字で表記したものの中に助詞や語尾を諺文で表記し文法関係を示した独特の文体を「朝鮮文(鮮文)」と定義した。そして、これが「旧朝鮮語学」のひとつの柱であることを明らかにし、その内容を精密化・体系化した。

(5) 日本人による朝鮮語学習書のロシア・ヨーロッパへの影響を明らかにした。

ロシア・東洋学院のG.V.Podstavin教授編纂の学習書が、日本人によって編纂・発行された朝鮮語学習書を少なくとも2冊底本としていることを明らかにし、当時の日本の「旧朝鮮語学」の影響がロシアに及んでいたことを初めて明らかにした。また、J.S.Gale、J.Rossなど西洋人も学習書編纂に際して、日本の「旧朝鮮語学」の成果を参照していたことを発見した。

この他、以下の研究もを行い、各項に示した成果を得た。

(6) 朝鮮人による学習書についての検討を行った。

具体的には、周時経などによる文法書の検討を行い、旧朝鮮語学との関連を検討・考察した。

(7) 植民地朝鮮で朝鮮語を学んだ元警察官へのインタビューを行った。

これにより、朝鮮総督府警察官講習所での朝鮮語教育の実情や状況、それを受けた人々の実情や状況について新たな事実が明らかになった。

- (8) 朝鮮総督府『朝鮮語辞典』に関して詳細な書誌学的調査を行った。
その結果、異本の系統やこの辞書の1945年以降への影響について明らかになった。
- (9) 近代日本の出版という視点を導入し、金島苔水(治三郎)による学習書類を分析し、その性質を明らかにした。
原物主義により得た詳細な書誌学的情報を用いつつ、漢語(中国語)学習書をも含む、金島苔水による一連の学習書類が商業出版物であったことについて論じた。
- (10) 『現今公文類集』の書誌学的調査と編纂理由の解明を行った。
ロシア・東洋学院のG.V.Podstavinが編纂した当該書の詳細な内容の解明を行うとともに、この教科書がロシア人に「朝鮮文」を教育するための教科書であったことを明らかにした。さらに、後に日本での朝鮮語教育のひとつの分野となる「朝鮮文」がすでに当時のロシアで注目され、教育されていたことを突き止めた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

植田晃次、金島苔水とその著書 - 日本近代朝鮮語教育史の視点から見た商業出版物としての朝鮮語学習書 -、日本語文化研究 第三輯、査読有、印刷中(掲載書名は予定)

矢野謙一、20世紀初めの日本人による朝鮮語文法、日本語文化研究 第三輯、査読有、印刷中(掲載書名は予定)

植田晃次、朝鮮総督府『朝鮮語辞典』の書誌学的研究、言語文化学 22、査読有、2013、pp.95-104

植田晃次、伊藤伊吉の経歴と著書 - 日本近代朝鮮語教育史の視点から -、言語文化研究 39、査読有、2013、pp.11-29、http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/bitstream/11094/24704/1/slc_39-011.pdf

植田晃次、明治期朝鮮語学習書・伊藤伊吉『独学韓語大成 全』の書誌学的研究、日本語文化研究 第二輯(下)、査読有、2012、pp.204-213

矢野謙一、日本における旧朝鮮語学 - 1880年から1893年まで -、日本語文化研究 第二輯(上)、査読有、2012、pp.297-304

〔学会発表〕(計9件)

植田晃次、島井浩の経歴と著書 - 日本近代朝鮮語教育史の視点から -、第64回朝鮮学会大会、2013年10月6日、於天

理大学

矢野謙一、J.S.Gale(1894)“Korean Grammatical Forms”と『交隣須知』、第64回朝鮮学会大会、2013年10月6日、於天理大学

植田晃次、金島苔水とその著書 - 日本近代朝鮮語教育史の視点から見た商業出版物としての朝鮮語学習書 -、第3回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム、2013年8月20日、於延辺大学(中国)

矢野謙一、20世紀初めの日本人による朝鮮語文法、第3回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム、2013年8月20日、於延辺大学(中国)

植田晃次、旧朝鮮語学の国外への影響 - ロシア・東洋学院G.V.Podstavin教授をめぐって -、第63回朝鮮学会大会、2012年10月7日、於福岡大学

矢野謙一、朝鮮文の語彙と文法第63回朝鮮学会大会、2012年10月7日、於福岡大学

植田晃次、赤峰瀬一郎の経歴と著書 - 日本近代朝鮮語教育史の視点から -、第62回朝鮮学会大会、2011年10月2日、於天理大学

植田晃次、明治期朝鮮語学習書・伊藤伊吉『独学韓語大成 全』の書誌学的研究、第2回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム、2011年8月23日、於延辺大学(中国)

矢野謙一、日本における旧朝鮮語学 - 1880年から1892年まで -、第2回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム、2011年8月23日、於延辺大学(中国)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

植田 晃次 (UEDA, Kozi)
大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：90291450

(2)研究分担者

矢野謙一 (Yano, Kenichi)
熊本学園大学・外国語学部・教授
研究者番号：00271453

(3)連携研究者

なし